

思ふも思ふれど我空しくなれば定めて他より手
を入る式も計りかゝり誰れ頼にあらんと思ひを致さ
以て安く死しむる害路の障りあるものをも宣ひ
尾張守にて我より新てり給は明日も過さむと云
は世程より何れにも解る違ふ事にもありしと存
れども左程思召ふ事なく誰れと申も無く此門
より何れも長岡殿の願ふ所と申され我光
公少官実にも憂ふ事ありとて谷地へ使者を遣しけ
程多く長岡殿より着して長岡の對面にて件の趣きお達
る長岡守にて扱ひ日頃の望も今時を得たりと云ふの

幸ひとて早速に幕府に申し上る指折し及び時々天正十
二年甲申六月七日早朝お度々調へ馬に打ち寄り己の
刻をかりし山形着るもの山形より外候府に危急を告る
長岡城下の様子を窺ひに屋形様の中氣色以外の外
とて上りつゝとて又つゝとて中城より差者の侍先
きて家老を城外柳へ出迎ひしに式禮して城内入りぬ
長岡城に入り屋形の仲を見廻せし奥の次近諸士列
座し寢所の次より一門家老を語代の面々にも居り
書院より寢帷より成院院其外寺社方醫師等数多
相詰居る中寢所より疾く改定中入り給ふ有りければ